

元朝にとってのナヤン・カダアンの乱

——二つの乱における元朝軍の編成を手がかりとして——

吉野 正史

はじめに

至元二四年（一二八七）四月に反クビライの兵を起こしたナヤン（乃顔）であるが、その勢力は同年八月ごろまでには元朝軍によって制圧された。しかし、九月にはカチウン・ウルスのカダアン（哈丹）が再び兵を挙げる。それに対して元朝の世祖クビライは、皇孫テムル（鉄穆而）を総指揮官として再度討伐部隊を編成したのである。争乱は長期化し、至元三十年（一二九三）ごろまで中国東北地域を騒がせることとなった⁽¹⁾。

前稿⁽²⁾において、筆者はナヤンの乱における元朝軍の編成について考証を行い、その内容を可能な範囲で明らかにし

た。その概要は表一の通りである。

また、それによって、（一）乱の平定にあたって元朝が既に東北周辺に配置を完了していた部隊を主に動員したと、（二）全軍の陣容と参加人物の身分などから、元朝の朝廷そのものが規模を縮小しつつ移動してきたとも言えることから、元朝の各種機構の高級官員の多くがモンゴル軍的色彩を多分に帯びていることと同時に、この時期の元朝も、イエケ・モンゴル・ウルス（大蒙古国）時代⁽³⁾の遊牧国家的性質を、本質的には尚維持していたと考えることができることなどを指摘した。

本稿では、まずカダアンの乱について、前稿と同様に軍の編成を考証したい。カダアンの乱は、至元二六年以前と二七年以後でその状況がことなり、それが編成にも大きく

影響していることから、四年以上にわたる事件を前期と後期に区分した。

そして、二つの乱における元朝軍の編成を手がかりとして、元朝にとって乱がいかなる政治的意味を持っていたのかについて、「国家」レベルと「地域」レベルという二つの角度から論じてみたい。

また前稿において筆者は、ナヤン挙兵の前夜、至元二三年ごろまでには、元朝によってナヤンらの勢力が包囲された状態となっており、元朝はナヤンによる反乱を誘発することも視野にいれていたのではないかと考えた。では、何故この時期に元朝はナヤンらに「挙兵させる」必要があったのか、またそれに対してどのような政治的条件が整っていたのか、筆者の試論を述べてみたい。

一、カダアンの乱前期（至元二六年以前）の 元朝軍の編成

本節では至元二四年十月のカダアンの挙兵から、二五年の元朝軍によるカダアン軍主力部隊の撃破を経て、二六年に東北地方に展開していた元朝側主力部隊が、カイドウ（海都）らへの備えとしてモンゴル・中央アジア方面に転戦するまでの時期を扱う。この期間では、元朝軍の各部隊

元朝にとってのナヤン・カダアンの乱

表一 ナヤンの乱平定戦における元朝軍の編成

○主力軍	
クビライカーン	
・クビライ・ケシク	
皇孫テムル	
・テムル側近	
・枢密院諸臣	
・中央官員、幕僚など	
・コンギラト投下軍	
・上都駐留諸軍	
・蒙古軍主力	
・五投下軍	
・漢人諸衛軍	
・別動部隊	
○遼東・遼西方面軍	
・皇子アヤチ軍	
・遼東宣慰司軍	
・北京宣慰司軍	
○永平路駐屯軍	
○水達達路方面軍	
○カラコルム方面軍（キプチャク軍）	

は、皇孫テムルを総指揮官として、テムルに属するものと、皇子アヤチ（愛牙赤）に属するものに大きく分けられる。前者には、皇孫テムルの側近のほか、オンギラト投下軍、蒙古軍主力、キプチャク軍、漢人諸衛軍などが置かれ、後者には遼陽行省軍、五投下軍、諸王などが配置された。但し、二五年に行われた元朝側のカダアン側に対する大規模な作戦においては、アヤチに属していた部隊も多くがテムルと行動を共にした。

本節及び次節では、カダアンの乱平定戦に参加した人物を、各軍ごとに出来る限り編成別にグループ化し、全体の特徴を明らかにしたい。尚、本節と次節の考証をもとに製作したものが、稿末の表である。以下における人名前の数字は稿末の表と対照する際の便宜を図る為に加えたものである。

(1) 皇孫テムル軍

至元二七年六月末から七月にかけて、ナヤン側の主力を壊滅させ、ナヤンを捕縛したクビライが上都に帰還した後、皇孫テムルが元朝主力軍の指揮をとった。元朝主力軍は、那兀江（現在の嫩江）まで進撃したのち、九月に（恐らくは上都に）帰還しているが、十一月にはテムルにトクトガ（土土哈）らと共に海刺の地に赴かせ、元朝に反旗を翻した諸王兀塔海を討たせている。⁽⁵⁾二五年、元朝側の諸王エジ

表二 カダアンの乱平定戦における元朝軍の編成
(至元26年以前)

- 皇孫テムル軍
- 皇孫テムル
- ・コンギラト投下軍
- ・蒙古軍主力
- ・キプチャク軍
- ・漢人諸衛軍
- 皇子アヤチ軍
- ・諸王軍
- ・五投下軍
- ・遼陽行省軍

ル（也只里）が、カダアンにくみした諸王コルコス（火魯哈孫）の攻撃を受けるに至って、元朝はナヤン平定戦時の主力部隊を中心とした討伐部隊を編成し、テムルにその指揮を取らせた。⁽⁶⁾

・皇孫テムル及びその側近

ではテムル自身には、どのような人物が付き従ったのだろうか。そこで手がかりとなるのが次の史料である。

完澤以大臣子選為裕宗王府僚屬。裕宗為皇太子、署詹事長。（中略）自是常典東宮衛兵。裕宗薨、成宗以皇孫撫軍

北方、完澤兩從入北⁽⁷⁾。

これによれば、オルジェイ（完澤）は裕宗チンキム（真金）が「皇太子」となった際、詹事長に任ぜられ、⁽⁸⁾「東宮の衛兵をつかさどった」ということがわかる。東宮の衛兵とは恐らくチンキムのケシク（怯薛）のことだろう。即位前のテムルにも、カアンや他の諸王と同じく専属ケシクが置かれていた⁽⁹⁾ことから考えて、チンキム逝去後はテムルのケシクをまとめていたのだと思われる。

そして、チンキム亡き後は、二度にわたり皇孫テムルの北方への出兵に従ったとある。テムルが軍を率いて出兵したのは、ナヤン・カダアンの乱平定時と至元三〇年の称海（ハンガイ山脈の西辺）への出鎮の二回のみである。これらのことから考えて、オルジェイ以下のケシクたちがテムルの身辺にあったことは明白だろう。オルジェイのほかに、詹事丞の三・王慶端がナヤン平定戦に引き続きいてその身辺にあったことが確認できるほか、⁽¹⁰⁾チンキムのケシクでありテムルとも近い関係であったと考えられる四・月魯哥⁽¹¹⁾、五・買住⁽¹²⁾も参加していたと思われる。

・コンギラト投下軍

コンギラト部当主で尚書省平章政事の六・テムル（帖木兒）は、ナヤンの乱平定戦に続き、今回も一軍を率いてユステムルらと共に重要な役割を果たした。⁽¹³⁾その麾下にどの

ような人物が属したかは明らかではないが、ナヤン平定戦時と同じく、コンギラト部族によって構成されていたと考えてよいだろう。

・蒙古軍主力

ボオルチュ（博爾朮）の後裔であり、ケシク長・御史大夫である九・ユステムル（玉昔帖木兒）もナヤン平定戦に引き続き一軍の指揮を取った。⁽¹⁴⁾ユステムル麾下の部隊構成も不明な点が多いが、ナヤン平定戦時に蒙古軍主力部隊の一角を担った十・玉哇失⁽¹⁵⁾及びその部下の十一・的迷的兒⁽¹⁶⁾並びに十三・バイテムル（伯帖木兒）⁽¹⁷⁾が、この度もユステムルに属していることから、基本的にはナヤン平定戦時と同じ構成であったと考えられる。

・キプチャク軍

ナヤン平定戦の際、カラコルムから南下し主力軍に合流した十七・トクトガ（土土哈）率いるキプチャク軍は、そのまま皇孫テムルの指揮下に入った。⁽¹⁸⁾閻復「樞密句容武毅王碑」には、カダアン軍を撃破した後、その地に東路萬戸府が置かれ、トクトガに管理させたことを示唆する記載がある。ナヤン平定戦時、トクトガに従っていた十八・欽察衛百戸乞台の子哈贊赤がカダアン討伐に参加したとの記録があるが、父と同じくトクトガ麾下にあったと思われる。

・漢人諸衛軍

ナヤン平定戦において漢人諸衛軍を率いた司農卿の十九李庭は、至元二五年二月、クビライの命を受けて再び出撃した。⁽²⁰⁾ 樞密副使の二〇、哈答がその副官となった。史料上には、李庭らと皇孫テムルの統属関係は示されないが、『元史』李庭列伝の記載は、「樞密句容武毅王碑」のものと対応することから、皇孫テムルに従っていたことがわかる。

(2) 皇子アヤチ軍

クビライの第六子である二二、アヤチ（愛牙赤）は、ナヤン平定戦において遼東・遼西方面軍の指揮を取ったが、引き続き同方面での指揮を担った。諸王の軍、五投下軍、並びに遼陽行省軍などがその統制下に置かれた。⁽²³⁾

・諸王軍

二三、ナイマダイ（乃蛮台）は、オッチギン家出身の諸王であるが、ナヤン側ではなく元朝側についた。カダアン平定戦においては、アヤチ並びに遼陽行省の官員たちと行動を共にしている。⁽²⁴⁾

他に、アヤチの麾下にあった二五、脱脱台と共に史料上に現れる二四、トゴン（脱歓）という諸王がいる。当時、この名を持つ諸王は太祖皇帝第六子闊列堅太子位の安定王脱歓、或いは世祖皇帝第九子鎮南王脱歓が考えられるが、確定することは難しい。

・五投下軍

行台御史大夫の二六、ボロゴン（博魯歡）は、ナヤン平定戦において五投下の軍を率いて参戦した。当時は、クビライの主力軍に属していたが、「既而其黨哈丹復叛，詔與諸侯王乃馬帶討之。」という記載並びにその行動から、今回はナイマダイと共にアヤチの軍に属していたと考えられる。⁽²⁵⁾ ボロゴン麾下には、恐らくは五投下の軍が配置されたと思われるが、至元二五年三月の「敕遼陽省亦乞列思、吾魯兀、札刺兒探馬赤自懿州東征」⁽²⁶⁾ という史料から、イキレス、ウルウト、ジャライルの部隊は別行動をとり、ボロゴン自身は彼の出身部族であるマンガト部の部隊のみを率いていたという可能性も否定できない。

・遼陽行省軍

カダアンが兵を起こした至元二四年十月、范文虎の奏上により遼陽行省が置かれたが、それは一義的に東北地域の軍事的な地域的安定を目指したものであった。遼陽行省設立の際、平章政事にはセチェゲン（薛闡干）とチェリクテムル（闍里帖木兒）、右丞に洪茶丘（洪俊奇）、左丞に亦兒撒合、参知政事に楊仁風とアラール・ウッディーン（阿老瓦丁）が任命されたが、楊仁風を除きナヤンの平定戦の参加者となっている。⁽²⁷⁾ 当時、セチェゲン、チェリクテムル、洪茶丘はクビライの主力軍に、亦兒撒合とアラール・ウッディーンはアヤチの軍に属していた。遼陽行省軍の編成は、筆頭

平章である三〇・セチェゲン⁽²⁸⁾を中心に、蒙古都萬戸を兼ねる三一・チェリクテムル⁽²⁹⁾、高麗軍民總管の三二・洪重喜⁽³⁰⁾（洪万）、同じく高麗軍民總管で東征左副都元帥の三三・兀愛⁽³¹⁾、遼東宣慰使の三四・ターチュ⁽³²⁾（塔出）らにより構成されていた。

また、三五・フリン（忽憐）は、ナヤン平定戦の際にセチェゲンに従っており、少なくとも至元二六年夏頃までは、その麾下にあった。⁽³³⁾

以上をまとめれば、以下のようになる。カダアンの乱前期（至元二四年十月～至元二六年頃）においては、皇孫テムルと皇子アヤチが元朝軍の中心となるが、おおまかには皇孫テムルの下には乱平定のため各地から動員された部隊が置かれ、アヤチは東北地域を根拠地とする遼陽行省軍、五投下軍を指揮した。至元二六年から二七年までには皇孫テムル指揮下の部隊は他の地域に転戦或いは大都などに帰還し、その後はアヤチの指揮下にあった部隊が乱の鎮圧に当たることになる。

二、カダアンの乱後期（至元二七年以後）の 元朝軍の編成

至元二五年の戦いによりカダアン側は大きな打撃を受け、

元朝にとってのナヤン・カダアンの乱

表三 カダアンの乱平定戦における元朝軍の編成

（至元27年以後）

- ・ 諸王軍
- ・ 五投下軍
- ・ 遼陽行省軍
- ・ 遼東宣慰司軍

その後しばらく目立った行動は見られなくなる。至元二六年に、主力部隊はカイドウの侵攻に対抗するため杭海（ハングай）方面に転戦するなど東北を離れたが、アヤチ指揮下の各部隊によって、根拠地を追われたカダアン軍は長白山一帯に追い詰められ、二七年十二月には「殺人為糧」と記されるほどの飢餓状態に陥っていた。⁽³⁴⁾しかし、翌二八年一月、高麗国境守備隊の不手際により、元麗境界の鉄嶺を突破したカダアン軍は高麗内部に侵入することに成功する。⁽³⁵⁾

この時期、カダアン軍は文字通り「残党」となっており、元朝に正面から対抗しうる武力は持ち得なかった。また、カイドウ軍による攻撃が激しくなっていたことから、元朝側の戦略的な重要性はモンゴル・中央アジア方面へとより強くシフトしていた。そのため、カダアンの掃討戦はほぼ完全に遼陽行省ならびに東北に根拠を置くモンゴル諸王・貴族らに委ねられることとなる。

・諸王軍

至元二八年一月、高麗に侵入したカダアンを討つため、クビライはナイマダイ（乃蛮台）に兵一万を授けている。⁽³⁶⁾

この時、皇子アヤチは既にカダアン平定戦には関わっていなかったと思われるため、ナイマダイはカダアンの乱後期平定戦に参加していた人物のうちで最も高い政治的地位を有していたと思われる。⁽³⁷⁾しかし、『高麗史節要』に載せられた記事によれば、ナイマダイと遼陽行省長官のセチェゲンとの間に明確な統属関係は認められない。⁽³⁸⁾

また、『高麗史』に現れる都欽大王は、恐らく前述の諸王トゴンに比定できるほか、駙馬の阿右という人物が作戦に参加していることがわかる。

・五投下軍

『元史』博羅歡列伝によれば、「哈丹死、斬其子老的於陣。往返凡四歳。凱旋、俘哈丹二妃以獻、敕以一賜乃馬帶、一賜博羅歡。」とあり、ボロゴンがこの時期も引き続き平定戦に参加していたことがわかる。上記の阿右駙馬は、或いはボロゴンを指すとも考えられるか。

・遼陽行省軍

皇孫テムル以下の主力部隊が去った後、遼陽行省を中心とした部隊が諸王ナイマダイと共にこの地域の主な軍事力となった。『元史』世祖本紀至元二十七年十二月乙未の条

に以下のようにあり、

詔諸王乃蠻帶、遼陽行省平章政事薛閣干、右丞洪察忽、摘蒙古軍萬人分戍雙城及婆娑府諸城、以防合丹兵。また、『高麗史』忠烈王世家忠烈王十六年十二月癸酉の条には以下のようにある、

元平章事薛閣干、閣梨帖木兒、右丞塔出等率歩、騎一萬三千人來。

ナイマダイが率いた兵数が一万程であったことからみても、遼陽行省の占めたウェイトは大きかったといえるだろう。

また、至元二十七年十一月には、遼陽で徴収された馬六千匹のうち、肥えたものがチェリクテムルの部隊に分け与えられていることから、⁽³⁹⁾彼の率いた蒙古都萬戸府の騎兵は、カダアン側との戦いにおいても、なお大きな重要性を持っていたことがわかる。

そのほか、ナヤン平定戦ならびにカダアン平定戦前期においてユステムル麾下に属していたバイテムルが、至元二六年冬、東北地方に東路蒙古軍上萬戸府が設置されるに及び、⁽⁴⁰⁾その萬戸に任ぜられ、同時にセチェゲンの指揮下に入っている。

・遼東宣慰司軍

『高麗史』に「戊子、王迎那蠻歹大王、塔海元帥、于狻猊宣慰」という記載があるが、⁽⁴¹⁾ここに現れる塔海元帥とい

う人物は、『経世大典』「站赤」に記録されている遼東宣慰使のタカイ（塔海）⁽⁴²⁾だろう。タカイは至元二六年から大徳三年頃にかけて東北の政治に関わっており、この時は遼東宣慰司都元帥府元帥として、平定戦に参加したものであるうか。そうであれば、于浚猊宣慰という人物も恐らく遼東宣慰司に属する人物だと推測できる。

三、二つの乱における元朝軍の編成の比較

本稿第一節、第二節及び前稿での考察によりナヤンの乱・カダアの乱平定戦における元朝軍の編成の状況は凡そ明らかとなった。そこで本節では、両次の軍編成の構成を比較することによって、当時の政治的コンテキストの中で、元朝にとって乱が如何なる政治的意味を持つかを探る手がかりを見つきたい。

まず表一及び表二によって、ナヤンの乱とカダアの乱前期の軍編成の比較を行いたい。そこで明らかなのは、カダアの乱平定戦前期においては、永平路駐屯軍が恐らくは解散し、水達達路方面軍が皇子アヤチ軍に、カラコルム方面軍が皇孫テムル軍にそれぞれ編入させられ、全軍の上に立つものがクビライ・カアンから皇孫テムルに変わったという点以外は、両者の基本構成は一致するという点である。

また、筆者は前稿において、ナヤンの乱平定戦の後半においては、上都に帰還したクビライに代わり皇孫テムルが全軍の指揮をとったことを指摘したが、その時点で水達達路方面軍とカラコルム方面軍の主力軍への編入は完了しており、テムルが主力軍を率い、アヤチが遼東西方面の部隊を率いるという編成区分が出来上がっていたと考えられる。つまり、ナヤンの乱後半の編成とカダアの乱の前期の編成はほぼ完全に一致するということが指摘できる。

続いて、カダアの乱前期と後期の比較を行いたい。第二節で明らかにしたとおり、至元二五年に大きな打撃を受けたカダアン側は、その根拠地を追われることとなり、至元二七以後には、乱は「地域」レベルの問題となっていた。そのため平定戦後期の軍編成においては、遼陽行省軍が諸王ナイマダイ等とともに中心的位置を占めており、逆に言えば当時の遼陽行省が軍事行動或いは軍政を主な任務としていたということが指摘できるだろう。

更に、二つの乱を一つの「事件」としてみれば、至元二六年以前を前半期、二七年以後を後半期と見ることが可能だろう。そして前半期と後半期の軍編成からみて、元朝にとって、前半期は「国家」レベルの問題、後半期は「地域」レベルの問題として認識されていたと考えられる。そこに内包される政治的意味は多岐にわたるが、本稿では「国家」

レベルの問題として、皇孫テムルが次代のカアンとなるにあたって乱平定戦の総指揮を取った意味を、「地域」レベルの問題として、東北地域に置かれた恒常的政治機構としての遼陽行省の成立をとりあげたい。

四、ナヤン・カダアンの乱から「成宗テムル」の誕生へ

至元二年（一二八五）十二月、皇太子であった裕宗チンキム（真金）が四三歳の若さで急逝したとき、クビライの四人の嫡子の中、なお存命であったのは北安王ノムガン（那木罕）のみであった。しかし、ノムガンは長期にわたりカイドウに拘留され、またチンキムに皇太子位を与えた際、クビライとの間に確執があったことから、カアンの後継者とはみなされなかった。クビライの後継者としての資格を持つものは、チンキムの二子、テムルとカマラ（甘麻剌）のみだった。⁽⁴³⁾

これよりさき、至元十九年にクビライは詹事院を置き、オルジェイを右詹事、賽陽を左詹事に任命していたが、チンキム亡き後は、オルジェイをテムルに、賽陽をカマラに従わせていた。⁽⁴⁵⁾ 右左詹事をそれぞれ二人の皇孫につかせたことは、テムルとカマラを政治的にフラットな位置に置き、

互いに競わせる意味合いがあったのではないだろうか。その意味で、至元二三年にカマラを漠北に出鎮させ、翌二四年のナヤン平定戦にテムルを参加させることにより、互いにカアンの後継者候補として功を競わせたのだろう。

ナヤン・カダアンの平定に際して、テムルが成功を収めた一方、カマラは至元二六年の杭海の戦いでカイドウ側に敗北し、二七年冬には梁王に封ぜられ、雲南に出鎮させられていた。ノムガンが世を去った至元二九年、カマラは晋王に封ぜられたが、翌三〇年、テムルも漠北に赴き、それぞれカラコルム、称海方面の総指揮をとることとなった。⁽⁴⁶⁾

テムルが称海方面の指揮官となった際、その補佐を命ぜられたのが、ナヤン・カダアンの乱平定戦時に蒙古軍主力の指揮をとったユステムルであった。⁽⁴⁷⁾ ここで注目すべきは、このときテムル麾下にあったものの中に、ナヤン・カダアンの平定に参加した者が見られることである。史料上で確認できるものとしては、先の乱の平定においてはクビライの傍にあったケシクのアシャーブカ（阿沙不花）⁽⁴⁸⁾ 並びに祕書監の靳德進⁽⁴⁹⁾、皇孫テムルに従った右詹事のオルジェイ⁽⁵⁰⁾、御位下必闍赤の道家奴⁽⁵¹⁾、八魯剌思千戸のクルムシ（忽林失）⁽⁵²⁾、ケシクの月魯哥⁽⁵³⁾、ユステムルの下にあった前衛親軍都指揮使の玉哇失⁽⁵⁴⁾らである。

テムルが称海に駐留していた至元三〇年冬、クビライの

容態が悪化し、三一年正月、八〇歳の高齡で世を去った。上都においてクリルタイが開催され、テムルが新たなカアンに推戴され、成宗として即位をはたした。その際に昇格或いは恩賞を受けたもののなかで、ナヤン・カダアン(57)の乱平定に参加した人物を列記したものが表四である。合計で二人人となっているが、前稿で列記したナヤンの乱平定戦の参加者は七〇名であることから、成宗即位時に既に死亡しているものもあり、史料として伝わっていないものなどもあることを考慮すれば、単純に数字を見るだけでも決して少なくはない。

表中には様々な人物が名を連ねているが、大きくは御史台、秘書監、樞密院、クビライのケシク、そして東宮関係・テムルのケシクに分けることができるだろう。

彼らの動きと繋がりを知るために一つの鍵となるのが、ナヤンの乱平定戦にも参加したジャライル国王家シディ(碩德)の家で玉璽が発見されたという事件である。

クビライが天寿を全うしつつある至元三〇年末から三一年にかけてのある日、シディの家に玉璽が現れ、監察御史の楊桓(55)がそれを見たところ「受天之命、既壽永昌」と記されてあった。そして御史中丞の崔或はそれをテムルの母であるココジン・カトン(闊闊真、徽仁裕聖皇后)に献上した。テムルの即位後、玉璽はココジン・カトンの手により

成宗にもたらされる(56)。明代の文人、何喬新や楊慎が痛烈に批判するように、玉璽自体は捏造されたものであり、お手盛りの茶番であっただろう。しかし、崔或が御史大夫ユス(58)テムルと政治的に密接な関係にあり、そして、当時既に世を去っていたシディの妻がココジン・カトンと同じコンギラトの出身であること知る当時の人々にとっては、その意味は明らかであっただろう。

シディの家から玉璽が「見つかり」、それを御史中丞崔或がココジン・カトンに献上したということは、ユステムルをはじめとする御史台のテムル推戴の意を表すだけではなく、彼等とココジン・カトンとのつながりも表すものと考えられる。

上記の玉璽事件と密接な関係を持つのが、至元三〇年、漠北に出鎮した皇孫テムルに「皇太子宝」が与えられたことである。詳細な経緯については諸史料によって内容がこととなるが、その件に関わった人物からその政治的意味を知ることができるだろう。ユステムルの伝記史料が、「皇太子宝」の授与はユステムルの願いにより実現したと語る一方、廣西道廉訪使王忱(59)の行状には、それは王忱の奏により実現したと記される(60)。また『元史』王忱列伝には、王忱が後継者を定めるよう奏上し、平章不忽木がそれを取り次いだと語られる(61)。

表四 ナヤン・カダアンの乱平定戦参加者の成宗即位時における受官及び動向

名前	ナヤンの乱 平定戦	カダアンの 乱平定戦	平定戦時の 官職、身分	成宗即位時の受官・受封な ど	成宗即位時の動向	史料源
ユステムル (玉昔帖木兒)	参加	参加	御史大夫	太師	クリルタイにおい て成宗を支持	『集史』テムル・カアン紀、閻復「太 師廣平貞憲王碑」『靜軒集』卷3
道家奴	参加	参加?	御位下必闍 赤	従仕郎、資成庫副使	不明	黄潜「真定路總管府達魯花赤致仕道家 奴公墓誌銘」『金華黄先生文集』卷37
李庭	参加	参加	前中書左丞、 司農卿	珠帽、珠半臂、金帶各一等 を賜る	ユステムル、バヤンら と共に成宗を支持	『元史』卷162「李庭列傳」
董士選	参加	不参加	無し	資善大夫、江西行省左丞	不明	吳澄「平章政事董忠宣公神道銘」『吳 文正公集』卷32
トクトア (脱脱)	参加	参加	世祖怯薛	資德大夫、上都留守、通政 院使、虎賁衛親軍都指揮使	不明	『元史』卷119「木華黎列傳附脱脱列傳」
アシャー・ブ カ(阿沙不花)	参加	不参加	世祖怯薛、 千戸	大宗正府札魯忽赤	不明	『元史』卷136「阿沙不花列傳」
王伯勝	参加	不参加	世祖怯薛	嘉議大夫に進み、金虎符を 賜る	不明	『元史』卷169「王伯勝列傳」
ダーシユマン (答失蛮)	参加	不参加	世祖怯薛	奉議大夫、供膳司事	クリルタイにおい て成宗を支持?	『集史』テムル・カアン紀、黄潜「宣 徽使太保定國忠亮公神道碑」『黄文献 集』卷10上
オルジエイ (完澤)	参加	参加	右詹事	中書右丞相に留任	クリルタイにおい て成宗を支持	『集史』テムル・カアン紀、『元史』卷 130「完澤列傳」
王慶端	参加	参加	詹事丞	階資德大夫、金吾衛上將軍、 中書右丞、行徽政副使、兼 隆福宮左都威衛使	成宗を支持	歐陽玄「忠武王公身道碑」乾隆二十七 年「正定府志」卷47、程鉅夫「冀國王 忠穆公墓碑」『雪樓集』卷17、『元史』 卷151「王善列傳附王慶端列傳」
月魯哥	参加	参加?	成宗怯薛?	大都兵馬都指揮使	不明	虞集「高昌王神道碑」『道園類稿』卷 41
買住	参加	参加?	元裕宗怯薛	同知都護府事に留任するが 秩は従三品から二品に進む	不明	柳貫「買住諡文簡」『柳待制文集』卷 8
クルムシ (忽林失)	参加	不参加	八魯刺思千 戸	翰林承旨?	不明	『元史』卷135「忽林失列傳」

バヤン(伯顔)	参加	不参加	同知樞密院事	開府儀同三司、太傅、録軍國重事	クリルタイにおいて成宗を支持	『集史』テムル・カアン紀、元明善「丞相淮安忠武王碑」『清河集』卷3
トクトガ(土土哈)	参加	参加	樞密院副使、欽察親軍衛都指揮使	銀五百兩、鈔萬緡等を賜る	漢文史料によれば、カイドウ等への備えとして漠北に駐留。『集史』によればクリルタイに参加。	『集史』テムル・カアン紀、虞集「句容郡王世績碑」『道園類稿』卷38
アンバイ(暗伯)	参加	不参加	樞密院客省使	知樞密院事?	クリルタイに参加し、恐らくは成宗を支持	『集史』テムル・カアン紀、『元史』卷133「暗伯列傳」、同書卷154「洪君祥列傳」
鄭制宜	参加	不参加	平陽太原兩路萬戸	大都留守、少府監、武衛親軍都指揮使、知屯田事	不明	袁桷「忠宣鄭公行狀」『清容居士集』卷32、『元史』卷154「鄭鼎列傳附鄭制宜列傳」
バイテムル(伯帖木兒)	参加	参加	左衛親軍都指揮使司僉事	東路蒙古軍上萬戸府萬戸に留任	成宗が上都に向う際に兵千をもつて護衛する	『元史』卷131「伯帖木兒列傳」
岳鉉	参加	不参加	司天台提點	中奉大夫、昭文館大學士、知秘書監	不明	鄭元佑「知秘書監鎮太史院司天台事岳鉉第二行狀」『僑吳集』卷12
靳德進	参加	不参加	掌司天事	昭文館大學士、知太史院、司天台事	不明	趙孟頫「通政院事領太史院事靳公墓志銘」『松雪齋集』卷9、『元史』卷203「方技列傳」
テゲ(鉄哥)	参加	不参加	大司農	銀一千兩、鈔十萬貫を賜る	不明	『元史』卷125「鐵哥列傳」

いっぽう、『元史』阿魯渾薩理列伝によれば、「皇太子宝」は太史院事を領するアルグンサリ(阿魯渾薩理)によってテムルに届けられた。そしてそこには、翌年知太史院となる秘書監の靳德進も同行していた。⁽⁶²⁾

シデイの家で発見された玉璽を鑑識した楊桓は、至元三年に監察御史となる以前、秘書監丞であり、その前職は

太史院校書郎であった。そして成宗即位後、秘書少監に昇進するのである。⁽⁶³⁾司天台提點であった岳鉉も、成宗即位に際して靳德進と同じく昭文館大學士に任命され、知秘書監に昇進している。⁽⁶⁴⁾玉璽事件と「皇太子宝」の授与に秘書監が関わっていることは、間違いないだろう。

更に「皇太子宝」の下賜に関わる奏上を行った王忱は、

御史台の系統に属する肅政廉訪司（提刑按察司）の職を歴任しただけでなく、チンキムのケシク出身であった⁽⁶⁵⁾。

以上のような状況から考えれば、玉璽事件、そして「皇太子宝」の授与は、御史台、祕書監、ココジン・カトンらが推し進めた一連の政治工作であったと思われる。

他方、中書省にもテムルの推戴を支持するものたちがいた。中書平章であった不忽木は、ユステムル、バヤンらとともにクビライの遺詔を受け、テムルの即位に貢献したことで知られるが、中書右丞相であり右詹事として以前からテムルを支えていたオルジェイも、クリルタイに参加し、テムルを支持した⁽⁶⁶⁾。かつてオルジェイが讒言にあった際、不忽木の口ぞえによって讒言したものが罰せられることがあるなど、二人は政治的に近い関係にあった⁽⁶⁷⁾。

ナヤン・カダアンの乱平定戦時にテムルに付き従った側近たちも概ね昇進を果たしており、詹事長のオルジェイを中心としてテムル推戴に動き、オルジェイはまた、テムル側近と中書省、そしてココジン・カトンをつなぐ位置にいたと考えられる。

続いて、樞密院についてみてみたい。当時、樞密院を率いていたバヤンは、ユステムルらとともにテムル即位の立役者となったが、他の樞密院の人物がどのような動きをしたのか、また御史台、祕書監、中書省、ココジン・カトン

らとどのような関係にあったのかは、不明瞭である。しかし、『集史』テムル・カアン紀によれば、トクトガとアンバイ（暗伯）もバヤンらとともにクリルタイに参加している。長官であるバヤンの意向、そしてテムル即位後のトクトガとアンバイに対する処遇から考えて、樞密院全体として、テムル支持に動いたと考えるのが妥当であると考ええる。

本節の分析の結果、御史台、樞密院、中書省、祕書監、太史院など中央の重要政治機構に属する人物たちが、そろってテムル支持に動いたであろうことが明らかになった。彼らの繋がりの中心には、おそらくココジン・カトンがあった。

しかし、テムル自身と彼らの繋がりを考えるとき、ナヤン・カダアンの乱平定戦の存在を考えないわけにはいかないだろう。クビライ朝からテムル朝への移行は比較的穏便に行われたと、野口周一氏は指摘する⁽⁶⁸⁾。それは、上記の人物と機構の持つ政治力が、他を圧倒したからに他ならないからである。そして、テムルがその政治参加の初舞台であったナヤン・カダアンの乱平定において、彼等を率いて成功を収めたことは、彼が成宗として即位する政治の流れの始点であるといえるだろう。

五、遼陽行省の成立とその変質

至元二四年十月、范文虎の奏上により遼陽行省が置かれたが、至元二四年から大徳年間（一二八七—一三〇七）の間の参知政事以上の遼陽行省官員を示すと以下のようなになる。（※をつけた人物は東北を根拠とする一族の出身者である）

平章：セチェゲン（薛閣干）⁽⁶⁹⁾、チェリクテムル（闊里帖

木兒）⁽⁷⁰⁾、※ターチュ（塔出）⁽⁷¹⁾、沙藍⁽⁷²⁾、ココチュ（闊

闊出）⁽⁷³⁾、ハサン（阿散）⁽⁷⁴⁾、※洪君祥⁽⁷⁵⁾

右丞：※ターチュ、※洪茶丘（洪俊奇）⁽⁷⁶⁾、※洪重喜（洪

万）⁽⁷⁷⁾、※洪君祥、阿里灰⁽⁷⁸⁾

左丞：亦力撒合、ハサン⁽⁷⁹⁾

参政：楊仁風⁽⁸⁰⁾、※アラール・ウッディーン（阿老瓦丁）⁽⁸¹⁾、

※兀愛⁽⁸²⁾、王思廉⁽⁸³⁾、金誥⁽⁸⁴⁾

彼らのうちおよそ三分の一が、東北を根拠とする一族の出身であるが、実際には彼らの任期は中央から派遣された人物よりも長く、また武力的背景も持っており、彼らと中央の官員を組み合わせて運用するという枠組みとなっている。また、平章のうち、セチェゲンとチェリクテムルについては、前者は行省成立当初から少なくとも至大元年（一三〇八）⁽⁸⁵⁾まで、後者は大徳年間末ごろまでその任にある⁽⁸⁶⁾。

このことから、この時期の遼陽行省は、首席平章のセチェゲンを筆頭に、万戸の兵を率いるチェリクテムルが軍事的

中心となり、それぞれが武力を持ち東北地域を根拠とするジャライルタイ家のターチュ、洪福源家の洪茶丘、王綽家の兀愛らがそれを支えるという構図となっていたことがわかる。

このような遼陽行省の体制は、セチェゲンとチェリクテムルが行省を離れる大徳末年から至大元年ごろまで続き、高い内部凝集性と軍事力を持っていたと考えられる。

しかし、強い権力はまたその濫用を生み出した。或いはそれは政治的に必要な措置だったのかもしれないが、御史台の官員の目には濫用とうつつたのだろう。至元二九年二月、後にココジン・カトンに玉璽を献上することとなる御史中丞の崔或によって、セチェゲンの更迭が上奏され⁽⁸⁷⁾、また同じ月、チェリクテムルも崔或の上奏によってカダアン⁽⁸⁸⁾の乱平定を巡る汚職事件に巻き込まれることとなった。

しかし、実際に彼等が更迭或いは降職させられることはなかった。元朝にとって、なお政治的・軍事的に強力な遼陽行省を必要とする政治状況が存在していたからである。

だが、そのような政治状況が構造的に変化するとき、遼陽行省の官員たちも大きな影響を被ることとなる。

まず、中央アジアの情勢である。カイドゥを中心とする中央アジアの反元諸王の活動は、元朝にとって大きな脅威となっていたが、大徳八年（一三〇四）に至り、ドゥア、

チャバルらオゴデイ、チャガタイ系ウルスの諸王と元朝との間に和議が成立し、中央アジアからの脅威がなくなった。

次に、オッチギン・ウルスと元朝との関係の変化がある。

ナヤンの乱の後、トクトア⁽⁸⁹⁾（脱脱）がオッチギン・ウルスを事実上継承したが、トクトアが遼王に封ぜられると同時に、別系統のナイマダイ⁽⁹⁰⁾（乃蛮台）は寿王に封ぜられており、オッチギン家内部での権力はナヤンが当主であった時と比べ分散化されたと考えられる。また、トクトアラナヤンの乱後に東方諸王家の当主となった諸王は、元貞二年（一二九六）から大徳六年にかけて、カイシヤンがモンゴリアに出鎮した際にその指揮下で活動しており、⁽⁹¹⁾このころには、東方諸王家と元朝との関係は良好になっていたと思われる。

更に高麗王の地位向上も考慮すべきだろう。東北地域の行省は高麗への押さえとして役割も担っていたが、この時期にはクビライの血統を持つ忠宣王が高麗王となり、忠烈王と忽都魯揭迷述矢公主との婚姻により既に低下していたと考えられるその役割は、事実上終結したと考えられる。

これらの東北地域内部並びに周辺地域の政治状況の大きな変化とそれによる緊張緩和により、およそ二〇年にもわたり同一人物が行省のトップにあるという特殊な事態は終了し、大徳九年（一二三五）から至大四年までの間に遼陽

行省の人事権、軍権は大きく制限されることとなる。⁽⁹²⁾それに伴いセチェゲン、チェリクテムルの二人は行省を離れ、ジャライルタイ家、洪福源家、王綽家らの出身者も行省人事から外されていくのである。

東北地域における政治状況の構造的変化を象徴的に表しているのが、洪福源家の政治地位の変化である。洪福源の子、洪茶丘は高麗の経略や日本攻撃などに関わるなかで東北地域で高い政治地位を確立していった。その子である洪重喜も遼陽行省内で影響力を保ったが、クビライの血を引き、武宗カイシヤン並びにその母である興聖皇后ダギを後ろ盾とする忠宣王との政争に敗れた。重喜は潮州に流され、⁽⁹³⁾洪氏一族は東北地域の政治の表舞台から姿を消すこととなる。

彼らにかわり、東方地方で存在感を高めてくるのが、皇后ダギの勢力である。ダギは東北における権力の掌握を進め、自己の獮戸を東北各地に置くとともに、狩猟に関わる⁽⁹⁴⁾権益を握り、金銀などの鉱物資源に関わる利益もダギに帰⁽⁹⁵⁾することとなった。

おわりに

前稿において筆者は、ナヤンは挙兵以前に元朝側に軍事

的に包囲されており、乱の平定にあっては元朝側が主導権を握っていたことを指摘した。つまり、ナヤンの乱とは、オッチギン家を中心とする東方諸王家が、元朝側によって仕掛けさせられたものであったと考える。

しかし、元朝側がイニシアティブを握っていたとすれば、何故至元二十四年の時点で、ナヤンらの挙兵を惹起させたのであろうか。これは極めて複雑且つ難解な問いであるが、一つの試論として、以下に筆者の考えを示してみたい。

まず考えられるのが、至元二年（一二八五）のチンキムの急逝である。チンキムが世を去ったとき、クビライ・カアンの後継者候補であるチンキムの二人の息子―テムルとカマラは、政治経験、軍事経験ともに欠けていた。東方諸王家が元朝と一枚岩ではなく、元朝とカイドゥら中央アジアの諸王と敵対関係にあったなか、二人のうちどちらがカアンとなるとしても、カイドゥの問題をそのまま次世代に先送りすることは、元朝にとって極めて危険なことだったはずである。そして、元朝側にとって最も避けたい事態は、有力な後継者不在の中、クビライ崩御の間隙を狙って東方諸王家とカイドゥの挟撃を受けるというものだっただろう。

そのため、クビライ存命のうちに東北地方への支配体制を磐石のものにすることは、至元二年以後元朝にとって

喫緊の政治課題になったのではないだろうか。

しかし、モンゴル帝国西方において元朝と友好関係にあったフレグ・ウルスもそのころ大きな衝撃に見舞われていた。一二八二年、アバカ・カンが逝去したのち、その弟テグデルがイル・カンとなったものの、アバカの息子であるアルグンらの反対勢力によって内戦が引き起こされていた。一二八四年、アルグンはテグデルを倒し、カンの地位についていた。⁽⁹⁶⁾

至元二〇年（一二八三）四月、クビライは嘗て大司農であったボロト（孛羅）とイェケ・ケシクのケレメチであったイーサー（愛薛）⁽⁹⁷⁾をフレグウルスに送った。翌年冬二人はアルグンのもとに到っている。⁽⁹⁸⁾ボロトはそのままフレグ・ウルスに留まったが、「弘林忠献王神道碑」によれば、「両歳始達京師」とあり、イーサーは一二八五年に大都に戻っている。⁽⁹⁹⁾イーサーからアバカ即位の報告を受けたであろうクビライは、恐らくその年に再びオルド・カヤをアルグンのもとに遣わした。翌一二八六年オルド・カヤは、フレグ・ウルスに詔勅をもたらし、アルグンは正式にアバカを継ぐカンとして封ぜられた。⁽¹⁰⁰⁾フレグ・ウルスの内部が安定することは、カイドゥ側からすれば忌むべきことだっただろう。一方、ジュチ・ウルスに目を向ければ、ジュチ家宗主であったモンケ・テムルは、マムルーク朝のスルタン・バイ

バルスに対して、カイドゥとの同盟を持ちかけ、フレグ・ウルスを包囲する意図を持ち、カイドゥとも実質的な同盟関係にあった。⁽¹⁰¹⁾しかし、ジョチ家が絶対的にカイドゥを支持していたわけではなく、元朝とカイドゥとの勢力関係を現実的に観察していたのではないかと指摘する研究者もいる。⁽¹⁰²⁾

一二八〇年、モンケ・テムルの没後、ジュチ・ウルスは、シリギの乱の際に捕らえられ、ジュチ家に送られていたノムガン⁽¹⁰³⁾をクビライのもとに送還し、クビライを支持する統一クリルタイへの参加を決めた。⁽¹⁰³⁾一二八三／四年の、カイドゥのアントン⁽¹⁰⁴⁾（安童）解放も、ジュチ・ウルスの決定に影響を受けたものであった。

このようにみれば、至元二〇年から二三年頃にかけて、モンゴル帝国内部のパワーバランスは、元朝側に有利に動いていたのではないだろうか。「マルコ・ポーロ」によれば、ナヤンはカイドゥに対して元朝を挟撃するように要請したことが伝えられるが、⁽¹⁰⁵⁾実際には、カイドゥとしても決して動きをとりやすい状況にはなかった。事実、カイドゥが元朝、そしてフレグ・ウルスに対して戦端を開くのは、ナヤンが処刑されたのちの至元二五年（一二八八）のことなのである。⁽¹⁰⁶⁾至元二一年ごろには、クビライはナヤンらの「異志」を把握していた。⁽¹⁰⁷⁾そして、政治的条件の比較的整ったと思われる至元二三年、ナヤンらを挑発するように東京

行省を置いたのではないだろうか。

ナヤン・カダアン⁽¹⁰⁸⁾の平定によって、元朝の東北地域での支配体制は安定したものの、カイドゥとの抗争は尚続いていた。クビライ亡き後、カイドゥは更に積極的に元朝側に侵攻を行った。クビライ朝からテムル朝にかけての政治的連続性の背後にあったもの、それは元朝を脅かすだけの軍事力と政治力を備えた中央ユーラシアのオゴデイ系、チャガタイ系諸王の存在だっただろう。

そのような状況の中で、ナヤン・カダアンの乱は、元朝にとって「国家」レベル的には成宗テムル誕生の出発点となった一方、「地域」レベル的には恒常的政治機構としての遼陽行省成立の契機となり、遼陽行省は高い内部凝集力を持つ「強力な」行省となった。

しかし、ドゥア、チャバルらと元朝の和解は、対外的には政治的緊張を解消した一方、元朝内部の政治弛緩をもたらしたのではないだろうか。成宗以後、歴代カアンの交替には常に血なまぐさい露骨な権力闘争が行われた。また東北地域においては成立当初の遼陽行省を支えていた人々は姿を消し、この後東北地域の有力者は地方政治の表舞台からも遠ざかることになるのである。

註

- (1) 現在のところ、カダアンカダアンの乱に関する研究は極めて少なく、ナヤンの乱を扱う際に付言されるのみである。乱平定の経過について比較的詳しいのは叢佩遠「元初乃顔、哈丹之亂」(『社會科學戰線』一九九三年第三期)及び、叢佩遠『中国東北史 第三卷』(吉林文史出版社、一九八七)の関連部分(三八九—三九一頁)である。他に、乱が高麗に与えた影響を論じたものとして畢奥南「乃顔—哈丹事件與元麗關係」(『内蒙古社會科學(文史哲版)』一九九七年第三期)がある。

- (2) 吉野正史「ナヤンの乱における元朝軍の陣容」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五四、二〇〇九)。

- (3) 本稿では、便宜的にクビライ即位以前をイエケ・モンゴル・ウルス時代、即位以後を元朝時代として扱う。

- (4) 『元史』(中華書局点校本、以下同じ)卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」三六三三頁。

- (5) 閻復「樞密句容武毅王碑」(『靜軒集』卷三)。

- (6) 虞集「句容郡王世績碑」(『道園類稿』卷三八)。

- (7) 『元史』卷一三〇「完澤列傳」三二七三—三二七四頁。

- (8) 実際にはオルジエイが右詹事に、賽陽が左詹事に任命されている。『元史』卷一一「世祖本紀九」二四七頁。

- (9) 『元史』卷四〇「順帝本紀」八五五頁。「成宗潛邸四怯薛戸饑、賑米二百石、鈔二百錠。」

- (10) 程鉅夫「冀國王忠穆公墓碑」(『雪樓集』卷十七)。

- (11) 虞集「高昌王神道碑」(『道園類稿』卷四一)。

元朝にとってのナヤン・カダアンの乱

- (12) 柳貫「賈住諡文簡」(『柳待制文集』卷八)。
- (13) 『元史』卷一一八「特薛禪列傳附帖木兒列傳」二九一六頁。

- (14) 閻復「太師廣平貞憲王碑」(『靜軒集』卷三)。

- (15) 『元史』卷一三二「玉哇失列傳」三二〇九頁。

- (16) 『元史』卷一三五「口兒吉列傳附的迷的兒列傳」三二七八頁。

- (17) 『元史』卷一三一「伯帖木兒列傳」三一九五頁。

- (18) 閻復「樞密句容武毅王碑」(『靜軒集』卷三)。

- (19) 『元史』卷一三五「乞台列傳」三二八六頁。

- (20) 『元史』卷一五「世祖本紀十二」三〇八頁。

- (21) 『元史』卷一六二「李庭列傳」三七九八頁。「二十五年、

乃顔餘黨哈丹禿魯干復叛於遼東。詔庭及樞密副使哈答討之、大小數十戰、弗克而還。既而庭整軍再戰、流矢中左脅及右股、追至一大河、選銳卒、潛負火砲、夜泝上流發之、馬皆驚走、大軍潛於下流畢渡。天明進戰、其衆無馬、莫能相敵、俘斬二百餘人、哈丹禿魯干走高麗死。拜資德大夫、尚書左丞、商議樞密院事、官其長子大用、仍賜鈔二萬五千貫。」

- (22) 閻復「樞密句容武毅王碑」(『靜軒集』卷三)。「夏五月、與敵戰於兀魯灰、彼軍敗衄、也只里部眾盡復。師還至哈刺温山、聞叛王哈丹軼我邊鄙、宵濟貴烈河、大敗敵軍、哈丹脱身以竄。遼左諸部悉為我有、乃置東路萬戸府鎮守其地。」
- (23) 『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」三六三三—三六三四頁。「哈丹、八刺哈赤再叛、十月、重喜從諸王愛牙哈赤、平章塔出、都萬戸闍里鐵木兒征之。十二月、次木

骨不刺。時諸王脫歡、監司脫台以兵四千餘人與其黨戰、稍却、重喜率騎兵援之、冒鋒陷陣、大破其眾。又從諸王乃蠻帶、愛牙哈赤、平章薛闌干、與叛王兵戰于兀朮站、又戰于黑龍江、又戰于貼滿哈處、皆敗之。」

- (24) 『元史』卷一二一「博羅歡列傳」二九九〇—二九九二頁。
同書卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」三六三三—三六三四頁。

- (25) 『元史』卷一二一「博羅歡列傳」二九九〇—二九九二頁。

- (26) 『元史』卷一五「世祖本紀十二」三一〇頁。

- (27) 楊仁風はかつて断事官としてバヤンに従い南宋攻略に参加し、至元三年の東京行省設立に際して同僉樞密院事から行省参政に転任していた人物である。『元史』卷一四「世祖本紀十一」二八六頁。同書卷一二七「伯顔列傳」三一〇〇頁。

- (28) 『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」三六三三—三六三四頁。

- (29) 『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」三六三三頁。

- (30) 『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」三六三三頁。

- (31) 『元史』卷一六六「王綽列傳附兀愛列傳」三八九二頁。

- (32) 『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」三六三三頁。

- (33) 『元史』卷一一八「孛禿列傳附忽憐列傳」二九二三頁。

- (34) 『高麗史』卷三〇「忠烈王世家三」。

- (35) 『高麗史節要』卷二一。

- (36) 『高麗史』卷三〇「忠烈王世家三」。

- (37) 以下の記事がこのことを顕著に表している。『高麗史』

卷八九「齊國大長公主列傳」。「元將薛闌干平哈丹、謁公主、獻所俘男女五十、良馬五匹。王與公主置宴慰之。公主坐當中、那蠻歹坐其右、王坐其左。都歡大王、阿右駙馬、河西國王重慶郡王薛闌干、闌梨帖木兒、塔出等皆以次坐。翼日亦如之。」

- (38) 『高麗史節要』卷二一。「賊精騎修治軍容、復來對陣。那蠻歹大王以不及大戰、憤恨、欲與之戰。(中略)大軍縱擊、大敗之。遂班師、次石破驛。那蠻歹使謂薛闌干曰『賊魁未擒、不可不追。』薛闌干曰『如聖旨則可、何用多殺人為?』」

- (39) 『元史』卷一六「世祖本紀十三」三四二頁。

- (40) 『元史』卷一三一「伯帖木兒列傳」三一九五—三一九六頁。

- (41) 『高麗史』卷三〇「忠烈王世家三」。

- (42) 『永樂大典』卷一九四二三「站赤八」。

- (43) 李治安『忽必烈伝』(人民出版社、二〇〇四)六九六—六九七頁。

- (44) 『元史』卷十二「世祖本紀九」二四七頁。

- (45) 至元二九年にカマラが北安王に復帰した際、賽陽は雲南行省平章から内史に転任しているが、完澤の例からみても、賽陽はカマラの側近として常にその傍にあったのだろう。

『元史』卷一一五「顯宗列傳」二八九四頁。「二十九年、改封晉王、移鎮北邊、統領太祖四大斡耳朵及軍馬、達達國土、更鑄晉王金印授之。中書省臣言于世祖曰『諸王皆置傳、今晉王守太祖肇基之地、視諸王宜有加、請置内史。』世祖從之、遂以北安王傳禿歸、梁王傳木八剌沙、雲南行省平章賽

陽並為内史。明年、置内史府。」

(46) 李治安『忽必烈伝』六九八―七〇一頁。

(47) 閻復「太師廣平貞憲王碑」(『靜軒集』卷三)。

(48) 『元史』卷一二六「阿沙不花列傳」三二九七頁。

(49) 趙孟頫「通政院事領太史院事靳公墓志銘」(『松雪齋集』

卷九)、『元史』卷二〇三「方技列傳」四五三九頁。

(50) 『元史』卷一二〇「完澤列傳」三二七三―三二七四頁。

(51) 黃潛「真定路總管府達魯花赤致仕道家奴公墓誌銘」(『金

華黃先生文集』卷三七)。

(52) 『元史』卷一二五「忽林失列傳」三二八三頁。

(53) 虞集「高昌王神道碑」(『道園類稿』卷四一)。

(54) 『元史』卷一二二「玉哇失列傳」三二〇九頁。

(55) 『元史』卷一六四「楊桓列傳」三八五三頁。

(56) 黃潛「札拉爾公神道碑」(『黃文獻集』卷一〇上)。

(57) 何喬新「御史中丞崔或得傳國璽獻之」(『椒邱文集』卷八)。

楊慎「玉璽考」(『升菴集』卷六六)。

(58) 『元史』卷一七三「崔或列傳」四〇四二―四〇四四頁。

(59) 閻復「太師廣平貞憲王碑」(『靜軒集』卷三)。

(60) 蘇天爵「參知政事王憲穆公行狀」(『滋溪文稿』卷二三)。

(61) 『元史』卷一二九「王玉列傳附王忱列傳」三五六八頁。

(62) 『元史』卷二〇三「靳德進列傳」四五三八―四五三九頁。

(63) 『元史』卷一六四「楊桓列傳」三八五三―三八五四頁。

(64) 鄭元佑「知秘書監鎮太史院司天臺事岳鉉第二行狀」(『僑

吳集』卷一一)。

(65) 蘇天爵「參知政事王憲穆公行狀」(『滋溪文稿』卷二三)。

(66) 筆者はペルシア語を解さないため、『集史』を利用する

際は、英訳本及び中訳本を使用した上で、原文刊本を参照

した。Rashid al-Din Fazl Allah Hamadani; bih tashih va

tahshiyah-i Muhammad Rawshan Mustafa Musavi,

Jami al-tawarikh, pp.947, W.M. Thackston(Trans.),

Rashid al-Din, Rashiduddin Fazlullah's Jamii-t-

tawarikh. Compendium of chronicles, Part Two,

(Harvard University, 1999), pp.464。拉施特主編、余大

鈞・周建奇訳『史集』第二卷(商務印書館、一九八五)三

七五頁。『元史』卷一三〇「完澤列傳」三二七三―三二七

四頁。

(67) 『元史』卷一三〇「不忽木列傳」三二七〇頁。

(68) 野口周一「元代成宗朝における宰相層についての一考察」

(『新島学園女子短期大学紀要』第14号、一九九七)。

(69) 『元史』卷一四「世祖本紀十一」三〇一頁。

(70) 『元史』卷一四「世祖本紀十一」三〇一頁。

(71) 『元史』卷一三三「塔出列傳」三二二四頁、同書卷一九

七「陳韶孫列傳」四四四七頁。『高麗史』卷三〇「忠烈王

世家三」。

(72) 『元史』卷二〇「成宗本紀三」四三四頁。

(73) 『高麗史』卷三一「忠烈王世家四」。

(74) 『元史』卷一八「成宗本紀一」三九五頁、同書卷二二

「武宗本紀一」四八〇頁。『高麗史』卷三一「忠烈王世家四」。

(75) 『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪君祥列傳」三六三三

頁。

- (76) 『元史』卷一六「世祖本紀十三」三四二頁。
- (77) 『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」三六三四頁。
- 『高麗史』卷三三「忠宣王世家一」。
- (78) 『高麗史』卷三三「忠宣王世家一」。
- (79) 『元史』卷一四「世祖本紀十一」三〇一頁。
- (80) 『元史』卷一四「世祖本紀十一」三〇一頁。
- (81) 『元史』卷一四「世祖本紀十一」三〇一頁。
- (82) 『元史』卷一六六「王綽列傳附兀愛列傳」三八九二頁。
- (83) 姚燧「僉書樞密院事董公神道碑」(『國朝文類』卷六一)。
- (84) 『高麗史』卷三三「忠烈王世家五」。
- (85) 『元典章』典章四九刑部一一「流囚釋放通例」。
- (86) 『元史』卷一七四「郭貫列傳」四〇六〇頁。『高麗史』卷三三「忠烈王世家五」。
- (87) 『元史』卷一七三「崔彧列傳」四〇四三頁。「又言、『河西人薛闡干、領兵為宣慰、其吏詣廉訪司、告其三十六事、檄僉事簿問。而薛闡干率軍人禽問者辱之、且奪告者以去。臣議、從行臺選御史往按問薛闡干、仍先奪其職。』」
- (88) 『元史』卷一七三「崔彧列傳」四〇四四頁。「又奏、『(中略)。又監察御史塔的失言、女直人教化的、去歲東征、妄言以米千石餉闡里鐵木兒軍萬人、奏支鈔四百錠、宜令本處廉訪司究問、與本處行省追償議罪。』皆從之。」
- (89) 陳得芝「元嶺北行省建置考(中)」(『蒙元史研究叢稿』人民出版社、二〇〇五所収。初出は『元史及北方民族史集刊』一一、一九八七)一六四—一六五頁。
- (90) 『元史』卷二二「武宗本紀一」五〇一頁。
- (91) 松田孝一「カイシャンの西北モンゴリア出鎮」(『東方学』六四、一九八二)一〇—一二頁。
- (92) まず、大徳九年(一二三〇五)には成宗テムルの勅が降り、遼陽行省は高級官員の人事異動を独断で決定することを禁じられる(『元史』卷二二「成宗本紀四」四六二頁)。至大四年四月には、遼陽行省保有の虎符が中央により回収され、七月には更に圓符、璽書、驛券などが回収されている(『元史』卷二四「仁宗本紀一」五四二—五四四頁)。
- (93) 『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」三六三三—三六三四頁。『高麗史』卷二二「方臣祐列傳」。
- (94) 『元史』卷一一六「順宗后答己列傳」二九〇一頁。また『元史』仁宗本紀に「立海西、遼東鷹坊萬戸府、隸中政院。」などがある。『元史』卷二五「仁宗本紀二」五六九頁。
- (95) 『元史』卷二七「英宗本紀一」頁六〇五、同書卷二七「英宗本紀一」六一五頁。同書卷八八「百官志四」二二三—二三八頁。
- (96) Boyle, J.A., "Dynastic and political history of the Il-Khans", The Cambridge history of Iran. (Cambridge University Press, 1968, pp.364-367. ドーソン著、佐口透訳註『モンゴル帝国史五』(平凡社、一九七六)一五四—一七九頁。
- (97) 宮紀子『『農桑輯要』からみた大元ウルスの観農政策(上)』(『人文学報』第九三号、二〇〇六)。
- (98) Rashid al-Din Fazl Allah Hamadani, *bih tashih va tahshiyah-i Muhammad Rawshan Mustafa Musavi*,

Jami al-tavarikh, pp.1161, W.M. Thackston (Trans.), Rashid al-Din, *Rashiduddin Fazlullah's Jamiut-tawarikh: Compendium of chronicles*, Part Three, (Harvard University, 1999), pp.565°. 拉施特主編、余大鈞・周建奇訳『史集』第三卷(商務印書館、一九八六)一九三頁。

(99) 程鉅夫「拂林忠憲王神道碑」(『雪樓集』卷八)。

(100) Rashid al-Din Fazl Allah Hamadani; bih tashih va tahshiyah-i Muhammad Rawshan Mustafa Musavi, *Jami al-tavarikh*, pp.1161.

(101) Biran, M., *Qaidu and the Rise of the Independent Mongol State in Central Asia* (Curzon, 1997), pp.64.

(102) 村岡倫「カイドゥと中央アジアータラスのクリルタイをめぐる一」(『東洋史苑』第三十・三十一号、一九八八)。

(103) 赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』(風間書房、二〇〇五)一五五頁。

(104) Biran, M., *Qaidu and the Rise of the Independent Mongol State in Central Asia*, pp.64.

(105) 愛宕松男訳註『東方見聞録一』(平凡社、一九七〇)一七八—一七九頁。

(106) 劉迎勝『察合台汗國史研究』(上海古籍出版社、二〇〇六)二八六—二八八頁。Biran, M., *Qaidu and the Rise of the Independent Mongol State in Central Asia*, pp.57.

(107) 『元史』卷百二十「亦力撒合列傳」二九五八頁。

カダアンの乱平定戦における元朝軍の編成(統属関係表)

凡例：インデントは統属関係を表す。下にあるものはど関係上で下位のものである。人名の後の各情報はそれぞれ出自／職掌／出典を表す。

人名の横に――を加えたものについては、史料上直接確認は出来ないが、各状況から統属関係上その位置にいたと推測可能なものである。

I 至元二六年以前

1、皇孫テムル軍

一、皇孫テムル(のちの成宗)クビライの孫、チンキムの子／『元史』卷一三五「忽林失列傳」

二、完澤 蒙古土別燕／右詹事／『元史』卷一三〇「完澤列傳」

三、王慶端 漢族真定／詹事丞／『雪樓集』卷一七「冀國王忠穆公墓碑」、乾隆二十七年「正定府志」

卷四七「忠武王公身道碑」、『元史』卷一五一「王善列傳附王慶端列傳」

四、月魯哥 高昌／裕宗、成宗怯薛？／『道園類稿』卷四一「高昌王神道碑」

五、買住 不明／元裕宗怯薛？／『柳待制文集』卷八「買住諡文簡」

・コンギラト投下軍

六、帖木兒 弘吉剌。特薛禪の孫／尚書省平章政事、萬戸／『黃文獻集』卷十「江浙行中書省平章政事贈太傅安慶武

襄王神道碑、『鉅野縣志』卷二〇「大元加封宏吉烈氏相

哥八刺魯王元勳世德碑、『元史』卷一一八「特薛禪列傳」

七、脱憐 弘吉刺。按陳の裔孫／弘吉刺部千戸／『元史』

卷一一八「特薛禪列傳」

八、不只兒 弘吉刺。特薛禪の裔孫／不明／『元史』卷

一一八「特薛禪列傳」

・蒙古軍主力

九、玉昔帖木兒 阿兒剌。博爾朮後裔／御史大夫／『靜軒集』

卷三「太師廣平貞憲王碑」、『元史』卷一一九「博爾朮附

玉昔帖木兒列傳」

十、玉哇失 阿速／前衛親軍都指揮使／『元史』卷一三

二「玉哇失列傳」

十一、的迷的兒 阿速／百戸／『元史』卷一三五「口兒

吉列傳附的迷的兒列傳」

十二、皇餘澤 漢族真定／前衛侍衛親軍千戸／『常山貞

石志』卷二一「元故宣武將軍前衛親軍千戸皇公墓誌

銘」

十三、伯帖木兒 欽察／僉左衛親軍都指揮使司事／『元

史』卷一三一「伯帖木兒列傳」

十四、拔都兒 阿速／後衛親軍副都指揮使 出典：『元

史』卷一三一「拔都兒列傳」

十五、鄭制宜 漢族澤州／平陽太原兩路萬戸／『元史』

卷一五四「鄭鼎列傳附鄭制宜列傳」

十六、道家奴 蒙古／御位下必闌赤／『金華黃先生文集』

卷三七「真定路總管府達魯花赤致仕道家奴公墓誌銘」

・キプチャク軍

一七、土土哈 欽察／樞密院副使、兼欽察親軍衛都指揮使／

『靜軒集』卷三「樞密句容武毅王碑」、『道園類稿』卷三

八「句容郡王世績碑」、『元史』卷一二八「土土哈列傳」

十八、哈贊赤 察台。乞台の子／欽察衛百戸／『元史』

卷一三五「乞台列傳」

・漢人諸衛軍

十九、李庭 女真蒲察／司農卿／『元史』卷一六二「李庭列

傳」

二十、哈答 不明／樞密副使／『元史』卷一六二「李庭

列傳」

二十一、失刺拔都兒 阿速／尚乘寺少卿、管阿速軍千戸／

『元史』卷一三五「失刺拔都兒列傳」

2、皇子愛牙赤軍

二二、愛牙赤 クビライ第六（八）子／『元史』卷十四「世

祖本紀十一」

・諸王軍

二三、乃蠻台 鐵木哥幹赤斤後裔／『元史』卷一五四

「洪福源列傳附洪萬列傳」

二四、脱歡 諸王／『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪

萬列傳」、『高麗史』卷八九「齊國大長公主列傳」※太祖

皇帝第六子闊列堅太子位の安定王脱歡、或いは世祖皇帝

第九子鎮南王脱歡か。

二五、脱脱台 不明／監司？／『元史』卷一三三「塔出列傳」

・五投下軍

二六・博魯欽 忙兀／行台御史大夫／『吳文正公文集』卷三
三「江南諸道行御史臺大夫魯國元獻公神道碑」、『牧庵集』
卷一四「平章政事蒙古公神道碑」、『元史』卷一二二「博
羅歡列傳」

二七・月列台 亦乞列思／イキレス部当主／『元史』卷

一一八「李禿列傳附鎖兒哈列傳」

二八・脱欽 兀魯兀台／不明／『元史』卷一二〇「朮赤
台列傳」

二九・慶童 兀魯兀台。脱欽の弟／不明／『元史』

卷一二〇「朮赤台列傳」

・遼陽行省軍

三〇・薛闡干 黨項／河西國王、重慶郡王、遼陽行省平章政
事／『元史』卷一一八「李禿列傳附忽憐列傳」、同書卷
一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」

三一・闍里帖木兒 不明／遼陽行省平章政事、蒙古都萬
戸府萬戸／『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列
傳」、同書卷一六六「王綽列傳附兀愛列傳」

三二・洪万 高麗／高麗軍民總管／『元史』卷一五

四「洪福源列傳附洪萬列傳」

三三・兀愛 高麗／高麗軍民總管、東征左副都元帥
／『元史』卷一六六「王綽列傳附兀愛列傳」

三四・塔出 札刺亦兒／遼陽行省右丞、遼東宣慰使／
『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」、『高麗
史』卷三〇「忠烈王世家三」、「永樂大典」卷一九四
一八「站赤三」

元朝にとってのナヤン・カダンの乱

三五・忽憐 亦乞列思。月列台の弟／不明／『元史』卷
一一八「李禿列傳附忽憐列傳」

II 至元二七年以後

・諸王軍

II 一・乃蠻台 鐵木哥幹赤斤後裔／一／『高麗史』卷三〇「忠烈
王世家三」、「高麗史節要」卷二一

II 二・脱欽 諸王／一／『高麗史』卷八九「齊國大長公主列傳」

II 三・阿右 不明／駙馬／『高麗史』卷八九「齊國大長公主列傳」

・五投下軍

II 四・博魯欽 忙兀／行台御史大夫／『吳文正公文集』卷三三

「江南諸道行御史臺大夫魯國元獻公神道碑」、『牧庵集』卷一

四「平章政事蒙古公神道碑」、『元史』卷一二二「博羅歡列
傳」

II 五・月列台 亦乞列思／イキレス部当主／『元史』卷一一

八「李禿列傳附鎖兒哈列傳」

II 六・脱欽 兀魯兀台／不明／『元史』卷一二〇「朮赤台列
傳」

II 七・慶童 兀魯兀台。脱欽の弟／不明／『元史』卷一

二〇「朮赤台列傳」

・遼陽行省軍

II 八・薛闡干 黨項／河西國王、重慶郡王、遼陽行省平章政事
／『元史』卷一六「世祖本紀十三」、「高麗史」卷三十「忠烈
王世家三」、「高麗史」卷八九「齊國大長公主列傳」『高麗史
節要』

Ⅱ九 闍里帖木兒 不明／遼陽行省平章政事、蒙古都萬戶府萬戶／『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」、同書卷一六六「王綽列傳附兀愛列傳」

Ⅱ十 伯帖木兒 欽察／東路蒙古軍上萬戶府上萬戶／『元史』卷一三一「伯帖木兒列傳」、『高麗史』卷三

○「忠烈王世家三」※至元二六年一月に一旦ケルレン河方面に転戦するが、年末に東路蒙古軍上萬戶府が置かれると共に、再び東北戦線に復帰、二七年より闍里帖木兒の指揮を受ける。

Ⅱ十一 洪万 高麗。洪俊奇の子／高麗軍民總管／『元史』卷一五四「洪福源列傳附洪萬列傳」※至元二八年から遼陽行省右丞。

Ⅱ十二 兀愛 高麗／高麗軍民總管、東征左副都元帥／『元史』卷一六六「王綽列傳附兀愛列傳」※至元二六年から遼陽等處行中書省事。二九年に東征左副都元帥府を總管高麗女直漢軍萬戶府に改める。

Ⅱ十三 塔出 札剌亦兒／遼陽行省右丞、遼東宣慰使／『元史』卷一三三「塔出列傳」、『高麗史』卷三十「忠烈王世家三」※至元二八年より蒙古軍萬戶を兼ねる。翌年遼陽行省平章政事に昇格。

Ⅱ十四 洪俊奇 高麗／遼陽行省右丞／『元史』卷一六「世祖本紀十三」、同書卷一五四「洪福源列傳附洪茶丘列傳」※至元二八年に病没、子の万が同職を継ぐ。

・遼東宣慰司軍

Ⅱ十五 塔海 遼東路總管六十の兄／遼東宣慰司都元帥府

元帥／『元史』卷一六「世祖本紀十三」、『高麗史』卷三十「忠烈王世家三」、『永樂大典』卷一九四二三「站赤八」

Ⅱ十六 于浚猊 不明／遼東宣慰使／『高麗史』卷三十「忠烈王世家三」